

ISBN 978-4-903875-24-8

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 21

ユーラシア諸言語の動態 III 一言語の多様性と類型と混成言語—
ユーラシア言語研究コンソーシアム 2019 年 12 月発行

Dynamics in Eurasian Languages III: —Diversity, Typology and Mixed language—

Kobe City College of Nursing / Consortium for the Studies of Eurasian Languages

(December 31, 2019), pp. 151-176.

未来の出来事に言及する現代アルメニア語の動詞形式について

On the conjugation forms in Modern Armenian that refer to future events

岸田 泰浩

KISHIDA, Yasuhiro

(大阪大学 Osaka University)

未来の出来事に言及する現代アルメニア語の動詞形式について^{*1}

岸田 泰浩

【キーワード】アルメニア語、動詞体系、活用形、未来、通時的変化

1. 現代アルメニア語の動詞体系

現代アルメニア語には、東アルメニア語 (Eastern Armenian, *arevelahayeren*) と西アルメニア語 (Western Armenian, *arewmtahayerēn*) という二つの文語がある。コーカサスに近いアララット方言を基盤とする前者は、アルメニア共和国の公用語であり、グルジア、アゼルバイジャン、イランなどでも使用されている。一方、アナトリア方言から発した後者は、トルコ、シリア、レバノンなどの周辺地域だけでなく、欧米などの世界各地に離散したアルメニア人達の間で使われている。二つの文語には、正書法、音韻、形態などにおいて相違点がある。

動詞の基本的な活用については、一般的に(1)のような体系を持つとされる (次ページ参照)。形態的な面では、東アルメニア語と西アルメニア語で大差はないものの、同じ形式が異なる意味用法を持つという興味深い差異を示す。

- | | | |
|-------------------------------------|----------------|---------------|
| (2) a. V- <i>elu/-alu</i> + BE | 西: (未来分詞 + BE) | 東: 直説法未来・過去未来 |
| b. <i>piti</i> + 単純形 | 西: 直説法未来・過去未来 | 東: 義務法未来・過去 |
| c. <i>k-/kə</i> + 単純形 ^{*2} | 西: 直説法現在・過去 | 東: 条件法未来・過去 |

*1 本研究は、科学研究費補助金「研究課題:「混成言語」から見なおすユーラシアの諸言語一言語接触と言語形成の類型を探る」(基盤研究 B [16H03417, 2016-2018 年度])、研究代表者: 藤代節 (神戸市看護大学)」と「研究課題:「混成言語」を通して見るユーラシアの諸言語一言語接触と言語生態」(基盤研究 B [19H01257, 2019-2021 年度])、研究代表者: 藤代節 (神戸市看護大学)」の支援を受けている。また、科学研究費補助金「研究課題: Evidentiality の形態的・統語的特徴に関する類型論的研究」(基盤研究 C [19K00551, 2019-2021 年度])、研究代表者: 岸田泰浩 (大阪大学)」の支援を受けた研究の知見も含まれている。

*2 東アルメニア語の接頭辞 *k-*は、語頭が子音の動詞に前接する際、[ə]が挿入されて発音される。西アルメニア語の *kə* は動詞と分離して表記されるが、母音始まりの動詞では ə が欠落し、表記は *k'(k')* となり、動詞に前接する。正書法においては違いがあるが、音声的振る舞いは両アルメニア語で同じである。

(1) 現代語の動詞活用体系^{*3}

西アルメニア語	東アルメニア語
直説法 現在：kə + 単純形 未完了過去：kə + 単純形過去 アオリスト[過去]：(-c'-) 未来：piti + 単純形 過去未来：piti + 単純形過去 現在完了 I：V-ac + BE 過去完了 I：V-ac + BE 過去 現在完了 II：V-er + BE 過去完了 II：V-er + BE 過去	直説法 現在：V-um + BE 未完了過去：V-um + BE 過去 アオリスト[過去]：(-c'-) 未来：V-elu/-alu + BE 過去未来：V-elu/-alu + BE 過去 現在完了：V-el + BE 過去完了：V-el + BE 過去
接続法（希求法） 現在(未来)：単純形 過去：単純形過去	接続法（希求法） 現在(未来)：単純形 過去：単純形過去
命令法	命令法
	義務法 現在(未来)：piti + 単純形 過去：piti + 単純形過去
	条件法 現在(未来)：k-単純形 過去：k-単純形過去

V：本動詞語幹、-：接辞、+：語の組み合わせ、BE：コピュラ動詞=助動詞、単純形：動詞語幹-人称語尾

=====
 (2)a.は、東アルメニア語では活用形として認められているのに対し、西アルメニア語では通常、活用形には数えられない。(2)b.と c.は、西アルメニア語では直説法として、一方、東アルメニア語では法（ムード）として分類されるのが一般的である。しかし、西アルメニア語でも、過去未来の「piti + 単純形過去」が条件法に、「未来分詞+コピュラ」の組み合わせが義務法に相当する表現として用いられる。Gevorgyan-Ninness(2008)は、動詞の語彙的アスペクトによっては義務的モダリティが未来時制として解釈されることがあると指摘している (cf. Der Merguerian 2012, Dum-Tragut 2002, 吉村 2013)。実際、東アルメニア語の義務法と条件法を未来形の一種だとする見解もある (cf. Fairbanks & Stevick 1989, Gevorkian 2000, Zorc & Baghdasarian 1995)。

*3 アルメニア文字の転字は、Hübschmann-Meillet に準拠した方式を用いる。東西の現代語は、破裂音・破擦音の体系、及び、文字と音価の対応が異なる。具体的には、無声無気音と有声(無気)音の有声性が入れ替わるため、西アルメニア語で kə, piti, -ac と表記されたものは、各々、[gə], [bidi], [adz] と発音される。岸田(2001, 2008, 2018)を参照。

現代アルメニア語の動詞活用の名称は研究者間で統一されているとは言えず、先の(1)に示したのは一例である。活用の名称は、動詞の活用パラダイムの体系をどのように捉えているかにも関わる。(2)は、いずれも未来に起こる出来事に言及する用法をもつ形式であるが、先に指摘したように、それを基準に据えてすべてを未来形と捉える立場もある。所与の活用形を名付ける際、その中心的な用法を基準にすることはよくある。しかし、そのような用法に依存しすぎると、動詞のパラダイム全体の体系性や整合性が隠れてしまう恐れがある。活用形の基本的な意味機能に配慮し、全体のバランスも考慮しながら、アルメニア語の動詞体系をどう捉えなおすべきか、別の言い方をすると、意味機能と形態などの体系性を意識しつつ、所与の活用形にどのような名称を与えるべきかを考えることが重要である。そのためには、まず、それぞれの活用形の基本的な意味機能を明らかにしなければならない。そこで、現代アルメニア語の動詞体系を見直すための第一歩として、本稿では、(2)に挙げた、未来の事態に言及するアルメニア語の動詞形式に焦点を当て、欧米で出版されたアルメニア語の学習書などにおいて示された意味用法をもとにその基本機能を探る。また、対象とする形式がなぜそのような基本機能を持っていると考えられるのか、そして、同じ形式でもなぜ東西アルメニア語でその基本機能に違いがあるのかということに関わる通時的・通言語的な事情についても考察する。なお、本稿では、諸文献に提示されている活用形の意味用法や名称をもとに考察を行うが、紙面が限られていることもあり、個々の用法についてアルメニア語の実例は挙げない。

2. V-*elu/-alu*+助動詞

まずは、東アルメニア語で直説法未来・過去未来だとされる形式を見てみよう。

2.1. 助動詞が現在形

《東アルメニア語》

(3) *grelu em - č'em grelu, kardalu em - č'em kardalu*

この形式は、動詞不定詞に *u* を付けた「未来分詞」と呼ばれる動詞形とコピュラ助動詞現在形との組み合わせからなる。東アルメニア語の動詞の不定詞形は-*el* ないし-*al* で終わる。以降、*gr-el*「書く」と *kard-al*「読む」の一人称単数の肯定と否定を形式例として挙げることにする。

grelu em 「書く(一人称単数肯定)」 - *č'em grelu* 「書かない(一人称単数否定)」

kardalu em 「読む(一人称単数肯定)」 - *č'em kardalu* 「読まない(一人称単数否定)」

上記の例にある *em* は、コピュラの一人称単数現在形で、*č'*-は否定接頭辞である。

学習書などにおいて、この形式は以下のような意味用法をもつとされる。(文献名に続く太字で示したものは、当該形式に与えられた名称である。)

- (4) Kozintseva (1995) : **future**
- a. a planned action which is expected or intended by the agent
 - b. prescriptive uses in utterances with imperative forms
- (5) Fairbanks & Stevick (1989) : /u/ **future**
- a. interchangeable with the /k'ə/ future and the /p'it'i/ future, except that the /p'it'i/ future form may indicate a mild obligation about like the English 'I am to'.
- (6) Gevorkian (2000) : *u-* **future**
- a. an action which the speaker has arranged to do or has decided to do in the future; "*going to do*"
- (7) Sakayan (2007) : **future (indicative)**
- a. actions or states that the speaker expects to take place in the future
 - b. it may connote determination, compulsion, threat or promise on the part of the speaker
 - c. it is linked to a condition expressed by a subordinate clause
 - d. exhortation
- (8) Der Merguerian (2012) : **futur simple**
- a. une action qui aura certainment lieu dans un temps à venir
 - b. une simple prévision de l'avenir
- (9) a. Bardakjian & Vaux (1999) : **future indicative**
 b. Hagopian (2005) : **simple future tense**
 c. Dum-Tragut (2009) : **simple future tense**
 d. Minassian (1980) : **futur**

上の記述から、当該形式の基本機能は、《未来》と考えてよいだろう。ただし、通常は、予定や遂行意志の意味合いを伴う。そこから、不可避的なニュアンスが生じ、(4)b.や(7)b.d.のような用法につながっていると考えられる。

《西アルメニア語》

- (10) *grelu em - grelu č'em, kardalu em - kardalu č'em**4

西アルメニア語では、通常、(10)の表現を動詞の活用形の一つとしては扱われず、未

*4 西アルメニア語の不定詞形は、-el と -al 以外に -il や (少数の) -ul で終わるものがあるが、東アルメニア語と揃えるために、-el と -al の形式のみを例として挙げる。

来分詞がコンピュータ動詞を伴って述語として使用される例であるとされる。つまり、コンピュータは東では助動詞であり、西では本動詞である。それゆえ、否定形においては、動詞とコンピュータの基本的な語順が東西で異なる ((3)と比較)。

(11) Bardakjian & Thomson (1977) : **dative of the infinitive, future participle**

- a. an action which will take place or which must be done
- b. it can express a supposition

(12) Hagopian (2007) : **future participle II**

- a. not only obligation but also probability; possible or probable action in the future with a hint of necessity and uncertainty; obligatory connotations

(13) Sakayan (2012) : **declined infinitive in the genitive case**

- a. appears in verbal constructions such as *aselu em* 'I must say'

(14) Der Merguerian (2012) : **participe futur; futur de nécessité présent**

- a. une action que le sujet doit accomplir dans l'avenir

上に引用した記述は、未来分詞の用法であるが、《**当為性**》(義務性や蓋然性)を表すのがその機能であることが分かる。

2.2. 助動詞が過去形

《東アルメニア語》

(15) *grelu ēi - č'ēi grelu, kardalu ēi - č'ēi kardalu*

ēi は、コンピュータの一人称単数過去形である。

(16) Kozintseva (1995) : **future-in-the-past**

- a. a planned action that would occur in the future, as seen from a viewpoint in the past

(17) Gevorkian (2000) : *u-* **future-in-the-past**

- a. synonymous to the past conditional (an action which was supposed to take place after a certain time point in the past and which supposedly was not performed; "was/were supposed to ..., was to ..., was going to ...")

(18) Sakayan (2007) : **future imperfect**

- a. actions or states that were anticipated in the past but did not take place

(19) Minassian (1980) : **futur dans le passé**

a. une action qui allait avoir lieu dans le passé, mais qui n'a pas eu lieu

(20) Der Merguerian (2012) : **futur dans le passé (antérieur)**

a. une action qui allait se réaliser dans le passé

(21) a. Fairbanks & Stevick (1989) : /u/ **future** (a past future in *u*)b. Hagopian (2005) : **future in the past**c. Bardakjian & Vaux (1999) : **future indicative in the past**d. Dum-Tragut (2009) : **future in the past tense**

(15)の形式は、ある過去の時点を基準にした「未来」を表している。つまり、当該形式の基本機能はいわゆる《過去未来》である。先の直説法未来と同様、予定の意味合いが含まれる。また、過去のある時点から見た未来において起こる可能性があったが、実際は起こらなかった事象を表す用法が一般的である。しかし、実際には実現しなかったという意味は基準が過去にあることから生じる含意であると考えられる。「そうすることになっていった」というような、過去の時点を基準にしてそれ以降の事態に言及する表現は、過去の時点では実現が予告され、実現の可能性があったが、現在の時点から見れば、結局、実現には至らなかった（し、今後も実現されないだろう）という解釈になりやすい。なぜなら、もし当該の事態が実現していたのであれば、過去に実現した事態を表すアオリストなどの表現が選ばれ、もし、発話時においても未実現のままだが、未来において実現する可能性がまだ残されていることも伝えるのであれば、現在を基準にした未来形(3)などによって表現されるのが普通だからである。

《西アルメニア語》

(22) *grelu ēi - grelu č'ēi, kardalu ēi - kardalu č'ēi*(23) Sakayan (2012) : **declined infinitive in the genitive case**a. appears in verbal constructions such as *ert'alu ēi* 'I should have gone'(24) Der Merguerian (2012) : **participe futur; futur de nécessité dans le passé**

a. une action que le sujet devait accomplir dans un temps passé

西アルメニア語では、コピュラ動詞が過去になっている点を除き、基本的な未来分詞の用法に違いはない。また、英語の'I should have gone'のように、「実現すべきだったが、実現されなかった」という意味合いが出るのは、東アルメニア語の(15)と同じである。

本章で考察した東西アルメニア語の形式はほぼ同じであるが、コピュラを含めて、活用形の一つとして扱われるかどうか異なる。まだ実現していない未来志向の意味を持つ

という共通点は、両者が未来分詞を用いていることに由来する。そもそも「不定詞-u」の形が未来分詞として機能するには、形態的・意味的な動機がある。アルメニア語の不定詞は名詞的に用いられた際、格変化する。未来分詞は、不定詞の与格形に等しい。与格が持つ機能から推察すると、不定詞の与格形は《～することに向かう》を意味することになり、それが未来志向につながる。そして、それが分詞としての地位を得たのが未来分詞である。コンピュータと組み合わせると、《～することに向かう状態にある》を意味することから、「～することになっている」という予定や意志の意味合いを含む東アルメニア語の未来形に発達したと推察できる。東アルメニア語でも西アルメニア語でも、未来分詞としては、「当為性（義務性や蓋然性）」を表す用法を有するが、これは、「～することに向かっているので、～することから逃れられない」という解釈がもとになっているのだろう。なお、未来分詞、つまり、不定詞の与格形が、予定、意図、義務などを表す英語の(*be*) *to do* と形式的にも意味的にも類似している点を指摘しておきたい*5。

3. *piti*+単純形

次に *piti* と動詞の単純形が組み合わさった形式を見る。単純形自体は、いわゆる接続法がその基本機能であり、本節で考察する形式は、*piti*（一種の「不変化詞」）と動詞の接続法の組み合わせからなる。

3.1. 単純形が現在形

《東アルメニア語》

(25) *piti grem - č'piti grem* (~ *piti č'grem*), *piti kardam - č'piti kardam* (~ *piti č'kardam*)

単純形、すなわち、接続法には、現在形と過去形がある。まずは、単純形が現在形である場合を見てみよう。アルメニア語の否定は、動詞に否定接頭辞 *č'-* が付いて表されるが、当該の形式では、単純形の動詞ではなく *piti* に付くのが一般的である。つまり、*piti* と動詞が一体化して、一つの活用形になっていることが窺える。

(26) Fairbanks & Stevick (1989) : /p'it'i/ future*6

- a. also used as an equivalent of *I must, I have to, I am to*. The context makes clear whether the form means 'I have to go' or 'I'm going to go'. The /p'it'i/ form is very likely to be used with the meaning 'must, have to, am to'. The student is advised to use it in this meaning and to use /k'ə/ form for a simple future until he has had a lot of experience with the /p'it'i/ form

*5 アルメニア語では与格と属格が同形であるため、未来分詞は不定詞の属格形がもとになっているとも言えるが、その意味や英語との類似性に鑑みて、与格形と捉えるのが妥当であろう。

*6 東アルメニア語は破裂音・破擦音に有声音と無声無気音と無声有気音がある。無声無気音は、ejective/glottalized として発音される方言があり、/p'/, /t'/, /k'/ はそれを表している。

(27) Kozintseva (1995) : **future obligative mood**

- a. to the near future that is not separated from the present, the future of the present intention
- b. objective necessity, when the agent of the situation coincides with the modal subject who regards the prospective action as obligative in accord with his own will, needs, intentions, duties.
- c. subjective necessity; in the dialogue, the compulsion may be imposed by the speaker or by the addressee
- d. expectedness (futurity); a highly probable one, predetermined by destiny
- e. epistemic necessity; evaluates the situation as being highly hypothetically true; constructions expressing non-agentive situations unambiguously refer to an epistemic necessity

(28) Bardakjian & Vaux (1999) : **future obligatory mood**

- a. denotes obligation, necessity, intention, or moral duty, as with the English modal verbs *must, have to, need to, should, ought to*

(29) Gevorkian (2000) : **piti future**

- a. an action which the speaker has decided or arranged to perform in the future; synonymous to *u-* future
- b. it is necessary to perform an action; "*must, should* "

(30) Sakayan (2007) : **mandative future**

- a. actions or states anticipated by the speaker in the future; it contains a sense of necessity or obligation, which at times can be perceived as an action contrary to the speaker's wish
- b. at times the forms with *petk' ē* expresses a stronger necessity; in the second person, *petk' ē* is widely used in orders
- c. it connotes determinations on the part of the speaker to carry out an action in the future
- d. in the second person, a supposition or presumption

(31) Der Merguerian (2012) : **futur d'obligation**

- a. une action qui devra se dérouler nécessairement, obligatoirement, dans l'avenir

(32) a. Hagopian (2005) : **obligatory mood (future)**b. Dum-Tragut (2009) : **debitive future**c. Minassian (1980) : **présent du mode obligatoire**

上の記述及び「義務(obligative, obligatory, mandative, debitive)」という語を含む形式名から、この形式の基本機能には《**当為性**》(義務性)が含まれていることが分かる。ただ、

実際の使用では、その義務性が和らぎ、予定や実現の可能性が高い未来を表す用法（蓋然性）もあるため、(29)a.や(5)a.のように、前章の未来を表す形式と意味が類似するとの指摘がある。また、義務性を強める場合は、*piti* に代わり、*petk' ē* が用いられる。

- (33) *petk' ē grem - č'petk' ē grem* (~ *petk' ē č'grem*),
petk' ē kardam - č'petk' ē kardam (~ *petk' ē č'kardam*)

この場合も、否定接頭辞は単純形の動詞ではなく、*petk' ē* に前接するのが通常である。*petk'* は「必要」を意味する古語(複数形)で、*ē* はコピュラの三人称単数現在形である（つまり、「(~する) 必要がある」が原義）が、否定辞は、*ē* ではなく、*petk'* に付く。それゆえ、「*petk' ē*+動詞」が全体が一つの活用形として認識されていると言える。

形式(25)に対しては、「未来/future」という言葉を冠した名称がよく用いられる。確かに、この形式が表す事態は、通常、未来の出来事であるが、これは《当為性》（義務や蓋然性）の意味特性から自然に生じる解釈である。「ある行為をしなければならない」と発言するのは、多く場合、その行為が実行されていないときである。当該行為がすでに実行されているのであれば（規則などの一般的な義務を伝える場合を除き）、そのように発言することは通常はない。(27)e.や(30)d.のように未来の事態とは限らない用法もある。従って、この形式、特に名称について、「未来」を強調する必要はないと考えられる。

《西アルメニア語》

- (34) *piti grem - piti č'grem, piti kardam - piti č'kardam*

否定辞は、*piti* でなく、動詞に前接するのが西アルメニア語の規範である。

- (35) Hagopian (2007) : **simple future**

a. actions and situations that will happen or take place after the act of speaking about them

- (36) Sakayan (2012) : **future**

- a. actions or states that the speaker anticipates in the future
 b. determination, compulsion, threat or promise on the part of the speaker
 c. linked to a condition expressed by a subordinate clause
 d. exhortation
 e. a guess or a presumption

- (37) Der Merguerian (2012) : **futur simple**

a. une action qui aura certainment lieu dans l'avenir

- (38) a. Bardakjian & Thomson (1977) : **future indicative**

西アルメニア語のこの形式は、通常、義務性の意味はなく、《未来》を表すのがその基本機能だと考えられる。(36)b.決意や e.推測などは、未来という意味から派生していると捉えることができる。ただし、西アルメニア語でも *pētk' ē* は義務を表す。

3.2. 単純形が過去形

《東アルメニア語》

(39) *piti grei - č'piti grei* (~ *piti č'grei*), *piti kardayi - č'piti kardayi* (~ *piti č'kardayi*)

(40) *petk' ē grei - č'petk' ē grei* (~ *petk' ē č'grei*),
petk' ē kardayi - č'petk' ē kardayi (~ *petk' ē č'kardayi*)

動詞が単純形過去（接続法過去形）になっている形式である。否定接頭辞の付き方も対応する現在形と同じである。また、*petk' ē* を用いる形式では、コピュラ起源の *ē* も現在形のままで、動詞本体のほうが単純形過去になる。

(41) Kozintseva (1995) : **past obligative mood**

- a. if the reference point coincides with the moment of speech, an action that had to be realized
- b. if the reference point is shifted to the past, an obligatory action in the future from a point in the past
- c. in the epic narration, an effect of inevitability
- d. with conditional adjunct of the type "*one more minute and ...*", an unrealized action that would be unavoidable if the situation had not changed

(42) Gevorkian (2000) : **future-in-the-past**

- a. an action which was supposed to take place after a certain time point in the past and which supposedly was not performed; "*was/were supposed to ..., was to ..., was going to ...*"; synonymous to *u-* future-in-the-past
- b. an action which would have been the right thing to do, but it was not carried out; "*should have done*"

(43) Sakayan (2007) : **mandative past**

- a. a potential action or state that according to the speaker could have occurred, but did not.
- b. advice or a reproach (in the second person)
- c. referring to the present time, wishes and desires in a more polite manner; "*I would/wouldn't*"

(44) Der Merguerian (2012) : **passé d'obligation**

a. actions qui devaient nécessairement, obligatoirement, se produire dans un temps passé

(45) a. Bardakjian & Vaux (1999) : **imperfect obligatory mood**

b. Hagopian (2005) : **obligatory mood (future in the past)**

c. Dum-Tragut (2009) : **debitive past**

d. Minassian (1980) : **imparfait du mode obligatoire**

当該の形式の基本機能は、(25)と同じように、出来事について《**当為性**》があることを示すことにあると考えられる。(25)との違いはその基準が現在ではなく、《**過去**》にあることである。(42)a.b.や(43)a.が述べている「実際には実現されなかった」という意味合いは、先の(15)と同じであり、その理由については2.2節で論じた。ただ、この意味は含意であるため、発話時点においてもまだ当該行為の実現が要求・要望されていることを排除するものではない。例えば、(43)b.やc.の用法では、「要望されていたことが実現されなかったが、もしまだ可能性があるなら、いまなおその実現が望まれている」というような解釈が背景にあると考えることができるだろう。

《西アルメニア語》

(46) *piti grēi - piti č'grēi, piti kardayi - piti č'kardayi*

動詞が単純形過去（接続法過去形）になっている形式である。否定接頭辞の付く場所も(34)の現在形の場合と同じである。

(47) Bardakjian & Thomson (1977) : **imperfect with *piti*, "conditional" mood**

a. in the main clause of hypothetical statements

(48) Hagopian (2007) : **future in the past**

a. actions which would or could take place in the future

b. something that was to happen in a future time which is in the past when the speech act occurs; only the wider context shows whether it happened or not

(49) Sakayan (2012) : **conditional (I)**

a. hypothetical, contrary to fact actions; the frequent use after conditional clauses that express factual or hypothetical events

b. a potential action or state that could have but did not take place

c. advice or reproach (in the 2nd person); when used with this stronger, almost mandative meaning, it is synonymous with the construction *pētk' ē* "one should, it is necessary".

d. it may refer to the present to express wishes and desires in a more polite manner

- (50) Der Merguerian (2012) : **futur dans le passé**
 a. une action qui allait se réaliser dans le passé

- (51) a. Feydit (1969²) : **conditionnel présent**

この活用形は、形式面だけでなく、意味的にも、(34)の基準点を現在から過去に移行したものが基本機能であると捉えることができる。ある過去の時点を基準としてそれ以降に起こる事態を表す《過去未来》である。また、(49)b.のような、実際には実現しなかったという用法は、東アルメニア語の(15)や(39)に対する解釈と同じ論理による。さらに、起こる可能性があったが、現実には起こらなかったというのは、現実が違ったものであれば起こったかもしれないことを示唆し、(47)a.と(49)a.の反事実を表す仮定法の用法につながる。この種の仮定法や(49)d.のような控えめな願望表現の用法は、英語の *will* が過去形の *would* になると現れる機能と並行的であり、当該のアルメニア語の形式を条件法(の一つ)と見なす立場もある。

4. *k-/kə*+単純形

本章では、動詞の単純形に *k(ə)* が前置された形式について考察する。

4.1. 単純形が現在形

《東アルメニア語》

- (52) *kgrem - č'em gri, kkardam - č'em karda*

東アルメニア語では、動詞に *k-* を前接させて表記される。動詞が子音で始まる場合、[kə] と発音されるが、母音[ə]は表記されない：*kgrem* [kəgərem], *kkardam* [kəkartʰam]^{*7}; *kaprem* [kaprem] < *aprel* "to live"。否定形では、*k-* の前にさらに否定接頭辞 *č-* を追加することができず、コンピュータ助動詞現在の否定形と動詞の「否定分詞」(*gri, karda*)を組み合わせられて形成される。

- (53) Kozintseva (1995) : **future conditional mood**

- a. real future, potential action, prescription; the future action about which the speaker is quite certain
- b. it may convey the action that is in progress at present and will be finished in the nearest future
- c. potential meaning where reference to the future is cancelled;
 - (i) in iterative constructions as a typical property of the agent, specific or generalized

*7 東アルメニア語では、本来は有声閉鎖音・破擦音を表す文字が無声有気音で発音される場合がある：*kkardam* [karktʰam]。これは、音韻規則によって予測できない語彙的特性である(岸田 2008 参照)。

- (ii) in generalized-personal constructions with the 2nd person, an objective potentiality
- d. in the directive utterances, the strongest order, demand. The hearer (performer) is implied to have no right to decline from performing the prescribed action
- e. in the main clause referring to a hypothetical potential action in the future that depends on the truth of the subordinate clause
- f. concessive sentences denote the action that will be fulfilled in spite of the state of affairs conveyed by the subordinate clause; "*even if ...*, ..."

(54) Bardakjian & Vaux (1999) : **future conditional mood**

- a. an action sure to be performed; easily replaced by the future obligatory or the future indicative
- b. polite request, offer, invitation (in the 2nd person interrogative form)

(55) Gevorkian (2000) : **future conditional / k- future**

- a. a future action; "*will + verb*"
- b. in the main clause in conditional sentences (with subjunctive in the conditional clause)
- c. in main clauses with the subordinate conjunctions "so that; if; until; when"
- d. commands (in the 2nd person)
- e. polite forms of request (in negative questions)

(56) Hagopian (2005) : **conditional mood**

- a. actions in the future which depend on a condition
- b. also common in proverbs and idioms

(57) Sakayan (2007) : **hypothetical future** (also suppositional, conditional, assertional mood)

- a. the speaker's strong belief that actions or events will take place at a given time in the future
- b. the speaker's determination, intention or promise to perform certain actions (more often in negative forms)
- c. in main clauses with a conditional clause in the subjunctive mood
- d. with reference to the present time, the speaker's assumption, guess or supposition
- e. in some contexts, recurrent actions and events; it loses its hypothetical meaning, resembling rather the present tense of the indicative mood; this meaning of regularity allows this tense to be widely used in Armenian proverbs

(58) Minassian (1980) : **conditionnel present**

- a. une intention, une supposition, une action dépendant d'une autre dans le présent

(59) Der Merguerian (2012) : **conditionnel futur**

- a. une action éventuelle ou possible sous certaines conditions; une action subordonnée à une condition réalisable
 b. une action qui se produira avec certitude dans un avenir proche

(60) a. Fairbanks & Stevick (1989) : /kʰə/ **future**

- b. Dum-Tragut (2009) : **conditional future (conditional 1)**

この形式の意味用法は多岐にわたる。「条件法」と名付ける文献が多いが、常に「もし A なら、B だろう」のような条件文で使用されるわけではなく、また、使用される場合も、条件を表す A の部分ではなく、帰結を表す B の部分に現れる。さまざまな用法の根底には、《ある状況のもとで実現する（可能性が高い）事態》を表すことがこの形式の基本機能としてあるのではないかと考えられる。「ある状況」が条件として明示化された場合が条件文である。(53)b.の用法では、目下の現状が「ある状況」に該当する。(53)c.(i)では、動作主自身が「ある状況」として捉えられている、つまり、「その人ならそうする」と解釈があるのだろう。(53)d.や(55)d.のような指示や命令も、聞き手自身が「ある状況」として捉えられ、聞き手であれば、その行為を実現することになる、つまり、聞き手はその行為を当然すべきであるという主張になる。(54)b.や(55)e.の依頼の用法「～していただけませんか。」もその延長線上にあると考えられるだろう。さらに「ある状況」が周知されているわけではない場合もある。例えば、(53)a.や(57)a.b.d.は話者の（個人的）信条や知識が「ある状況」になっていると考えられる。また、「ある状況」が世間一般の状況であるなら、(53)c.(ii)、(56)b.、(57)e.のように、「誰もがそうするのが普通である」、「そのような行為は繰り返される」、ことわざのように「そうなるのが世の中というものである」という意味合いが含意されることになる。なお、3.1 節で論じたように、この形式についても、未来の出来事を表すことは、その基本機能から派生すると考えられ、(53)c.や(57)d.のように現在の事態に言及する用法があることも考慮すると、未来の事態を表すということを名称において主張する必要はないだろう。

《西アルメニア語》

- (61) *kə grem - č'em grer* (3sg. *č'i grer*), *kə kardam - č'em kardar*, "to study" *k'usanim - č'em usanir* (3sg. *č'usanim*), "to come" *ku gam - č'em gar*

西アルメニア語では、動詞が子音で始まる場合は、*kə* を単純形に前置し、動詞が母音で始まる場合は、*ə* が発音上も脱落し、表記が *k'(q')* となり*8、動詞と続けて書かれる：*k'usanim* (*q'ուսանիմ*)。一部の単音節の動詞では、*ku* となる。否定形は、東アルメニア語

*8 「'」は、ejective を表す補助記号ではなく、アポストロフィのように実際に表記される。

同様、コンピュータ助動詞現在の否定形と動詞の否定分詞を組み合わせて形成される*9。

(62) Bardakjian & Thomson (1977) : **present indicative**

- a. often used with a future sense

(63) Hagopian (2007) : **simple present**

- a. current actions that are going on at the moment of speech or take place generally, usually

(64) Sakayan (2012) : **present (indicative)**

- a. events, actions, and states that are in effect in the present
 b. habitual actions
 c. action in future, implying that events have been arranged
 d. in certain narratives, it may indicate past action

(65) Der Merguerian (2012) : **présent simple (de l'indicatif)**

- a. une action qui soit se déroule au moment où l'on parle, soit a lieu habituellement

西アルメニア語の当該形式の基本機能は、《現在》だと言える。(64)b.習慣的な行為、(63)a.進行中の行為、(64)c./ (62)a. (確定的な) 未来の行為といった意味は、他言語の現在形も内包する意味用法である。

4.2. 単純形が過去形

《東アルメニア語》

(66) *kgrei - č'ēi gri, kkardayi - č'ēi karda*

肯定では、動詞部分は単純形過去となり、否定では、コンピュータ助動詞の過去形が否定分詞とともに使われる。

(67) Fairbanks & Stevick (1989) : **past future**

- a. generally as an equivalent of English forms like 'I would like, I would do' etc.

(68) Kozintseva (1995) : **past conditional mood**

- a. if the reference point coincides with the moment of speech, (i) unlikely possibility, (ii) polite requests, advices

*9 否定分詞は、東アルメニア語と語尾が異なり、-r を伴う。また、コンピュータ助動詞の三人称単数現在の否定形 č'i は、母音始まりの動詞の前では、i (実はこれがコンピュータ助動詞の本体；肯定では ē) が脱落し、k' と同じように、動詞と一体化して表記される：č'usanir (չ'ուսանիր)。

- b. if the reference point belongs to the past, (i) a possible prospective action in the past, (ii) habitual actions in the past

(69) Bardakjian & Vaus (1999) : **imperfect conditional mood**

- a. unreal wishes and desires, primarily in the 1st person singular
- b. polite request, offer, invitation (in the 2nd person interrogative form)

(70) Gevorkian (2000) : **past conditional** (future-in-the-past form)

- a. an action which was supposed to take place in the past, but did not, due to the absence of certain conditions; used in the main clauses in the conditional sentences (usually past subjunctive in the conditional clause)
- b. a desirable action which is impossible to carry out due to certain circumstances
- c. polite requests (in negative forms) and offers

(71) Sakayan (2007) : **hypothetical past**

- a. in some contexts, recurrent activities in the past; it loses its hypothetical meaning and resembles the past tense of the indicative mood
- b. in a temporal clause introduced by the conjunction "*before, by the time*" with a main clause featuring the aorist tense
- c. contrary-to-fact actions; frequent use in conditional sentences that leave the question open as to whether a condition is met
- d. non-factuality and uncertainty --> advice or request
- e. in polite interaction, forms of politeness
- f. in rhetorical questions, great expressivity is achieved "*Who would think ..., Who wouldn't wish...*"

(72) Minassian (1980) : **conditionnel imparfait**

- a. une intention, une supposition, une action dépendant d'une autre dans le passé

(73) a. Hagopian (2005) : **conditional past**

- b. Dum-Tragut (2009) : **conditional past**
- c. Der Merguerian (2012) : **conditionnel passé**

この形式が(52)から時間的基準を過去に移行したものであるとすると、その基本機能は、《ある状況のもとで実現した(実現する可能性が高かった)事態》ということになる。では、これが上記の諸用法の背景にあると考えられるかどうかを検証しよう。まず、「ある状況のもとで実現した事態」については、(68)b.や(71)a.がそれに当たるだろう。習慣的行為や行為の繰り返しは、(53)c.(ii)や(57)e.の過去バージョンである。一方、他の用法

の多くは、いわゆる反事実的仮定の用法である。これは、基本機能の「ある状況のもとで実現する可能性が高かった事態」という解釈に基づくと思われる。ある過去の時点以降に起こる事態に言及する表現は、実際には起こらなかったという解釈が生じやすい理由に関しては 2.2 節で論じた。ただし、(15)や(39)では、実現することになっていたが、その後にそれを妨げる状況が生じたからだというのが背景にあるのに対し、(66)では、実現の前提となる状況が存在しなかったために実現しなかったというのが背景にあるという点が異なる。つまり、(66)は、「ある状況のもとで実現する可能性が高かったが、その状況がなかった事態」という拡張的な意味用法である。それを別の面から見れば、「今もその状況にはないが、もしその状況になれば実現する」、つまり、「未実現」の事態を表すことにもつながり、例えば(70)c.、(71)e.、(69)b.の丁寧表現は「あなたの許しや望みがあるという状況では実現する」という解釈から生じているのだろう。仮定法が丁寧表現として用いられるのは、多くの言語で観察され、類型論的な動機があると考えられる。

《西アルメニア語》

(74) *kə grēi - č'ēi grer, kə kardayi - č'ēi kardar, k'usanēi - č'ēi usaner, ku gayi - č'ēi gar*

東アルメニア語と同じく、肯定では動詞が単純形過去を伴い、否定ではコピュラ助動詞の過去形が用いられる。

(75) Hagopian (2007) : **past imperfect**

- a. actions going on and incomplete in the past, at some moment before the speech; it describes background actions which run parallel to the action or situation in the subordinate clause

(76) Sakayan (2012) : **imperfect indicative**

- a. a continuous action carried out at a certain point in the past
- b. a habitual action in the past without being tied to a particular time or situation
- c. when applied to present time to politely express wishes and desires

(77) Der Merguerian (2012) : **imparfait**

- a. une action passée s'étant déroulée à un moment déterminé situé avant le moment présent
- b. une durée, une répétition, une continuité ou encore un état

(78) a. Bardakjian & Thomson (1977) : **imperfect indicative**

この形式は、(61)の時間的基準が過去になったものである。ただ、アスペクトとしては、完了ではなく、未完了である。過去の完了した事態は、別の活用形であるアオリストによって表される。従って、この活用形の基本機能は《未完了過去》であると言える。

5. 通時的・通言語的考察

本稿で提案した活用形の基本機能の妥当性を検証する一助として、本章では、アルメニア語の動詞体系の通時的変遷を概観するとともに、それと関わる通言語的・類型論的特性について考察する。

文語としてのアルメニア語史の始まりは、メスロプ・マシュトツ (Mesrop Mašt⁽⁴⁾oc', c.362-440) がアルメニア文字を創作したとされる五世紀初頭に遡る。そのときに整えられた「標準語」が古典アルメニア語 (Classical Armenian, *grabar* "written language") である。古典アルメニア語は長きにわたり規範的文語として君臨してきたが、一方でアルメニア語の話し言葉は独自の変遷を遂げてきた。19世紀になると、当時の大衆語をもとにした現代語 (*ašxarhabar* "worldly language") が古典語に代わる規範語としての地位を得るが、様々な事情で東西二つの現代語が誕生することになる。

- (79) a. 古典アルメニア語 5世紀～
 b. 後期古典アルメニア語 6～7世紀
 c. 中期アルメニア語以前 8～11世紀
 d. 中期アルメニア語 12～17世紀
 e. 現代アルメニア語 17世紀～現在 cf. Schmitt (1981)

長い歴史の中で、アルメニア語の動詞体系も変貌し、古典アルメニア語と比して、法も時制もその種類を増した。また、新しい表現の誕生とともに、既存の活用形が意味する概念も変化した。

(80) Hovsepian (1996) (一部改変)

法： <古典> 3種 (直説法, 命令法, 接続法)

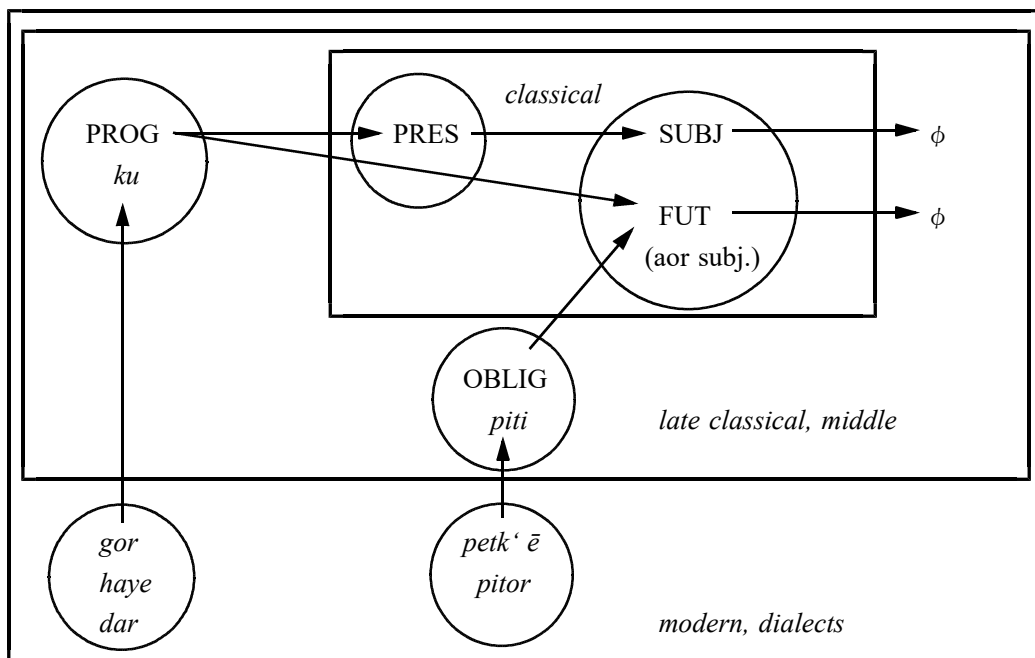
→ <中期, 現代> 5種 (直説法, 命令法, 接続法, 条件法, 義務法)

時制： <古典> 13種 (直説法 7, 接続法 4, 命令法 2)

→ <中期, 現代> 16種 (直説法 9, 接続法・条件法・義務法各 2, 命令法 1)

Moods	Tenses	Old Arm	Middle Arm	Modern Arm (<i>Western/Eastern</i>)
Indicative	Future	—	kamim grel	<i>piti grem</i> / <i>grelu em</i>
Debitative	Future	—	<i>piti grem</i>	<i>piti grem</i>
Optative	Future	—	<i>grem</i>	<i>grem/grem</i>
Conditional	Future	—	(<i>ku grem</i>)	<i>kgrem</i>
Indicative	Present	<i>grem</i>	<i>ku grem</i>	<i>kə grem</i> / <i>grum em</i>
Imperative		<i>grea</i>	<i>grē</i>	<i>grē</i> / <i>grir</i>
Subjunctive	Future I	<i>gric'em</i>	—	—
	Future II	<i>gresc'em</i>	—	—

(81) Vaux (1995)*10



(80)に見られるように、*grelu em* のような「V-*elu/-alu* + 助動詞」という未来を表す活用形は、アルメニア語の歴史の中ではかなり新しいものである。第2章で述べたように、西アルメニア語では活用形として確立していない。

東アルメニアは現在（と未完了過去）を *grum em* のような「V-*um* + 助動詞」で表現する。ここで用いられている動詞の形 *grum* は未完了分詞と呼ばれるが、接辞-*um* は名詞の所格形に等しい。つまり、原義としては「書いているところである」という現在進行形を意味し、そこから現在形一般の機能をもつに至ったのである。所格形は、東アルメニア語における革新で、西アルメニア語には存在しない。(80)や(81)が示すように、東西アルメニア語に存在する「*k-/kə*+単純形」もその起源は現在進行形である。

(82) *k-/kə* ← *ku* ← *kay* "exists" + *ew* "and" (Vaux 1995) or *kay* + *u* "and" (Khachatrian 1996)

この形式は"exists and V"、つまり、「Vして-いる」という表現方法に基づく。西アルメニア語では、「*kə*+単純形」は進行形から現在形一般に発展した*11。東アルメニア語では、さらに別の意味機能に進展したが、それについては後述する。Khurshudyan (2017)は、

*10 FUT:future、OBLIG:obligative、PRES:present、PROG:progressive、SUBJ:subjunctive、aor subj.:aorist subjunctive

*11 「*kə*+単純形過去」が未完了を意味するのは、元々の意味の名残である。

この進行形の誕生には、チュルク系言語との接触が影響していると述べている。

(83) The influence of Turkic and Iranian language contact is significant for the progressive forms (cf. Turkish progressive forms in *-yor-*, or Persian progressive forms with the auxiliary verb *dāštan* 'to have'). (Khurshudyan 2017)

「petk' ē+単純形」の原義が「～する必要がある」であることはすでに述べたが、(80)や(81)が示すように「piti+単純形」の起源も同じである。

(84) 古典語 *pētk'* "needs"(複数形)、*pitoy* "necessary" > *piti*

そして、先の(80)や(81)、そして、次の(85)に見るように、これらの新しい形式が同じ意味機能を持つ既存の活用形を駆逐した結果、新たな動詞活用体系が生まれたのである。

(85) Vaux (1985)

- a. the loss of the subjunctive tenses would automatically change the structure of oppositions within the verbal system, which might cause the present to acquire subjunctive semantics, the progressive to acquire simple present, and so on.
- b. the present subjunctive disappeared before the aorist subjunctive, the *ku* formation appeared before the simple present became the subjunctive, the desiderative future appeared before the loss of the aorist subjunctive, and so on.
- c. the various developments ... occurred independently and were not part of a system-wide chain shift.

これらの活用形の通時的変化は、アルメニア語のみに起こった特殊な事情だというわけではない。西アルメニア語のように、元来、義務を表す形式だったものが未来形になる現象は通言語的によく観られる。Bybee et al. (1994)は、その種の過程を次のように示している。

(86) OBLIGATION > INTENTION > FUTURE

東アルメニア語の「piti+単純形」においては、この意味変化が INTENTION で“留まっている”ために、西アルメニア語との間で同形異義の状況が生まれた。なお、アルメニア語は、後置定冠詞、属格形と与格形の融合など、バルカン言語連合と共通する特徴を持っているが、西アルメニア語の未来形「piti+単純形(=接続法)」も、未来時制を「modal+接続法」によって表す同言語連合とまったく同じ手法である^{*12}。

*12 言語接触により未来時制への発展が促進されたという可能性もあるだろう。

現在形が「動詞語幹＋人称語尾」という最も単純な形態をとるのは通言語的に一般的である。しかし、現代アルメニア語では、接続法がこのような単純形を採用している。実はここでも活用形の交替が起こっており、この単純形は古典語では現在形（と未完了過去形）であった。現代アルメニア語に観られる状況は、(82)のような新たな現在進行形が生まれ、それが現在形一般に発達したことによって、かつての現在形が接続法に追いやられた結果である（(81), (85)a.参照）。しかも、この史的变化もアルメニア語に限られたものでなく、他の言語でも起こっており、その背景を Bybee et al.(1994)や Haspelmath (1998)は次のように説明している。

- (87) a. when new tense and aspect grams arise, they do so primarily in main asserted clauses and only gradually take over the functions of the previously existing tense and aspect grams. Since non-assertive subordinate clauses are not used for the expression of focus or topic, they tend to be conservative grammatically, retaining older syntax and morphology. Thus a consequence of the gradual spread of new grams to more environments is that some subordinate clause environments will not be affected immediately, and here the older grams will continue to be used -- trapped, so to speak, in these conservative environments. Since in these contexts the surrounding semantic material has modal content, the old indicative forms themselves come to be associated with modality. (Bybee et al. 1994)
- b. The change [from a present tense to a future tense -YK] presupposes a situation in which a present tense is also commonly used with future meaning, e.g., a language lacking a special future tense. Now when a new progressive becomes obligatory, the old present is restricted to habitual and future uses. ... Now what happens to the old present if a separate future exists (or is developing simultaneously with the progressive/present), and the new present already covers the habitual meaning? In this case the only remainder of the old present domain may be the use in certain non-assertive or non-realized subordinate clauses, i.e., in the core domain of typical subjunctive. (Haspelmath 1998)

Haspelmath(1998)によると、古い現在形は、接続法ではなく、未来形になる場合もある。

(88) Haspelmath (1998)の Case studies

a. 現在形から接続法へ

Tsakonian (Greek), Modern Indic, Persian, Cairene Arabic, Modern Eastern Armenian

b. 現在形から未来形へ

Modern Welsh, Modern Hebrew, Lezgian, Turkish, Udmurt, Kannada

所与の言語において、現在形が接続法になるか、それとも、未来形になるかは、当該言語の類型論的特徴、特に、従属節の形態的・統語的タイプが関わっている可能性がある

るというのが Haspelmath(1998)の見解である。

- (89) Four of my five cases here are from Indo-European languages, and in the case of Armenian/Persian and Persian/Hindi, it is not inconceivable that language contact played a role in creating the similarities. ... More probable is a typological explanation of the parallels between these languages: Indo-European languages are particularly prone to develop subjunctives because they tend to make extensive use of finite subordination where languages such as Turkic, Uralic and Dravidian would use non-finite infinitives or converbs. Thus, the fact that Turkish, Udmurt and Kannada developed futures rather than subjunctives may be due to their subordination type. (Haspelmath 1998)

印欧語に属するアルメニア語は定形動詞から成る従属節を好むため、かつての現在形が接続法になり ((80)と(81)を参照)、他方、非定形節を頻用するトルコ語では古い現在形が未来形(「アオリスト」と呼ばれる)に移行したとされる。

- (90) new present tense *-yor-* と old present tense \Rightarrow Aorist *-Ir-* (Haspelmath 1998)

この新しい未来形は、現代トルコ語において次のような用法をもつ。

- (91) a. continuing activity; request, promise, stage direction, proverbs (Lewis 2000)
 b. 真理、習慣、属性、規則；単なる可能性；話し手の個人的見解や意志；依頼
 (林 2013)
 c. 習慣的な行為、一般性をもった出来事、真理；話者の予想；丁寧なお願い
 (川口 2016)
 d. 一般的真理・格言、立証された事実、真実；習慣・規則・反復的動作；不確実、仮定的な未来；丁寧な依頼；仮定法・条件法 (ギュルベヤズ 2016)

このような多様な用法を眺めると、単純に「未来形」と呼ぶのが躊躇われるが、実際、当該の形式は「アオリスト」と呼ばれ、「超越時制」(川口 2016)や「中立形」(林 2013)などの呼称も見られる^{*13}。

現在進行形を起源とする、現代アルメニア語の「*k-/kə* + 単純形」は、西においては現在(と未完了過去)をその基本機能とすると考えられるが、東においては、単に現在や未完了過去とするだけでは、その意味的派生を捉えにくい用法があり、西とは異なる基本機能を本稿では提案した。東西の現代アルメニア語で同じ形式が異なる基本機能をもつに至った背景には、東アルメニア語で「*V-um* + 助動詞」という新しい現在形の誕生

*13 林 (2013)は、過去とも現在とも未来とも言い難いので、仕方なく「中立」と呼ぶと述べている。ギュルベヤズ (2016)は「習慣・格言相」と名付けている。

がある。古い現在形(=単純形)が新しい現在形「ku + 単純形」((82)を参照)の出現によって接続法になったことに加え、東アルメニア語ではその「k-単純形」がさらなる新しい現在形「V-um + 助動詞」によって別の意味領域に追いやられたのである。

(89)のように、古い現在形が未来形になるか、接続法になるかは、従属節の類型論的特徴の違いによるとされるが、これは統語的な面であり、意味的な面では、Bybee et al. (1994)が先の(87)a.で述べているように、non-assertive で modal な環境で存続する。また、Haspelmath(1998)も、所与の言語に未来形が存在する場合、古い現在形は non-assertive ないし non-realized な環境で使用されるようになることを指摘している ((87)b.を参照)。

東アルメニア語には未来形「V-elu/-alu + 助動詞」が存在する。そして、トルコ語にも未来形(-AcAk)がある^{*14}。さらに興味深いことに、東アルメニア語の「k-単純形」が示す用法はトルコ語のアオリストの用法(91)と類似している。林(2013)は、トルコ語のアオリストの特徴を「一言で言えば現実感の欠如だ」と述べているが、この特徴は接続法に通じるところがある。これらの事情を勘案すると、《かつては現在形であった東アルメニア語の「k-単純形」は、新参の現在形によってその地位を追われ、未来形ないし接続法への道を歩んだものの、未来形と接続法がすでに存在していた、または、存在しつつあったために、カテゴリーとしてはいずれにも終着しなかったが、意味的には、現在形の意味合い(現実性)を残しつつ、未来形の特性(未実現)と接続法の特性(非現実)を兼ね備えた意味機能、いわば、「仮想的現実」を表す機能をもつに至った》と言えるのではないだろうか。現代アルメニア語が膠着的特性をもつ背景には、チュルク系言語の存在がある(cf. 岸田 2018)。一連の史的变化の引き金となった新しい現在(進行)形の誕生自体、チュルク系言語などからの影響があると Khurshudyan(2017)は指摘している^{*15}。トルコ語のアオリストと用法が似通っていることも考え合わせると、「k-単純形」の意味機能における変化には、未来形も接続法もすでに存在するという内的な事情に加え、言語接触という外的な事情も関与したであろうことは想像に難くない。

6. まとめ

本稿では、未来の出来事に言及する現代アルメニア語の活用形に焦点を当て、学習書などの記述をもとに、それらの基本機能がどのようなものであるかを検討した。また、通時的および通言語的な面から、問題の形式がそのような機能をどのような経緯で持つに至ったかを考察した。本稿で扱った活用形の基本機能をまとめたのが(92)である。

今後は、他の文献からもデータを収集し、事例にも当たりながら、今回、提示した基本機能の妥当性を検証していく。また、残りの活用形についても考察し、最終的には、活用形の名称も含め、現代アルメニア語の新しい動詞体系を提案したい。

*14 アルメニア語でも、トルコ語でも、未来形に「予定」や「遂行意志」の意味合いがあることも共通している。

*15 (83)を参照。

(92) 現代アルメニア語で未来の出来事に言及する動詞活用形の基本機能

	西アルメニア語	東アルメニア語
-clu/-alu + 助動詞 (現在形)	[未来分詞]	未来
-clu/-alu + 助動詞 (過去形)	当為性のある事態	過去未来
piti + 単純形 (現在形)	未来	当為性のある事態
piti + 単純形 (過去形)	過去未来	当為性のあった事態
k-/kə + 単純形 (現在形)	現在	ある状況のもとで 実現する事態 実現の可能性が高い事態
k-/kə + 単純形 (過去形)	未完了過去	ある状況のもとで 実現した事態 実現の可能性が高かった事態

謝辞

本稿の執筆に際し、査読者から有益なコメントをいただきました。感謝申し上げます。

参考文献

- Bardakjian, K. B. & R. W. Thomson (1977) *A Textbook of Modern Western Armenian*. Delmar: Caravan Books.
- Bardakjian, K. B. & B. Vaux (1999) *Eastern Armenian: A Textbook*. Delmar: Caravan Books.
- Bybee, J., R. Perkins & W. Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, aspect, and modality in the languages of the world*. Chicago: University of Chicago Press.
- Der Merguerian, R. (2012) *Arménien moderne: manuel pratique, branche occidentale et branche orientale - Étude comparative*. Aix-en-Provence: Presses universitaires de Provence.
- Dum-Tragut, J. (2009) *Armenian: Modern Eastern Armenian*. Amsterdam: John Benjamins.
- Fairbanks, G. H. & E. W. Stevick. (1989) *Spoken East Armenian*. New York: Spoken Language Services, Inc.
- Feydit, F. (1969²) *Manuel de langue arménienne (Arménien occidental moderne)*. Paris: Editions Klincksieck.
- Gevorgyan-Ninness, S. (2008) "Epistemic modality and aspect contingency in Armenian, Russian, and German," in W. Abraham & E. Leiss (eds.) *Modality-aspect interfaces: implications and typological solution*, 97-115. Amsterdam: John Benjamins.
- Gevorkian, A. V. (2000) *East Armenian Course*. Yerevan: Adana.
- Hagopian, G. (2005) *Armenian for Everyone: Western and Eastern Armenian in Parallel Lessons*. Ann Arbor: Caravan Books.
- Haspelmath, M. (1998) "The semantic development of old presents: new futures and subjunctives without grammaticalization," *Diachronica* XV:1, 29-62.

- Hovsepien, L. (1996) "The typological development of the Armenian language," in Sakayan (1996), 167-176.
- Khachatryan, A. (1996) "The Armenian sound system from typological aspect," in Sakayan (1996), 177-189.
- Khurshudyan, V. (2017) "Imperfective in Modern Eastern Armenian," a paper presented at Historical Linguistics of the Caucasus, École Pratique des Hautes Études in Paris, April 12-14, 2017.
- Kozintseva, N. (1995) *Modern Eastern Armenian*. München: LINCOM EUROPA.
- Lewis, G. (2000²) *Turkish Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Minassian, M. (1980) *Grammaire d'arménien oriental*. New York: Caravan Books.
- Sakayan, D. (ed.) (1996) *Proceedings of the Fifth International Conference on Armenian Linguistics*. Delmar: Caravan Books.
- Sakayan, D. (2007) *Eastern Armenian*. Yerevan: Yerevan State University Press.
- Sakayan, D. (2012) *Western Armenian*. Yerevan: Yerevan State University Press.
- Schmitt, R. (1981) *Grammatik des Klassisch-Armenischen*. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Tomić, O. M. (2006) *Balkan Sprachbund Morpho-syntactic Features*. Dordrecht: Springer.
- Vaux, B. (1995) "A problem in diachronic Armenian verbal morphology," in J.J.S. Weitenberg (ed.) *New Approaches to Medieval Armenian Language and Literature*, 135-148. Amsterdam: Rodopi.
- Zorc, R. D. & L. Baghdasarian (1995) *Armenian (Eastern) Newspaper and Grammar*. Kensington: Dunwoody Press.
- 川口裕司 (2016) 『初級トルコ語のすべて』 東京：IBC パブリッシング
- 岸田泰浩 (2001) 「アルメニア文字」河野六郎・千野栄一・西田龍雄編『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』, 73-82. 東京: 三省堂
- 岸田泰浩 (2008) 「東アルメニア語における有声閉鎖音・破擦音を表す文字の"無声化"について－正書法改革の忘れ物－」藤代節・庄垣内正弘編 *Dynamics in Eurasian Languages* (CSEL 14), 103-130. 神戸：神戸市看護大学
- 岸田泰浩 (2018) 「現代アルメニア語はどのような言語かーその地域的特徴ー」林徹他編 *Diversity and Dynamics of Eurasian Languages* (CSEL 20), 227-280. 神戸：神戸市看護大学
- ギュルベヤズ, アブドゥルラッハマン (2016) 『しっかり学ぶトルコ語』 東京：ベレ出版
- 千種眞一 (2001) 『古典アルメニア語文法』 東京：大学書林
- 林徹 (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』 東京：白水社
- 吉村貴之 (2013) 『東アルメニア語文法 I & II』(平成 25 年度言語研修テキスト) 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

On the conjugation forms in Modern Armenian that refer to future events

Yasuhiro KISHIDA

KEYWORDS: Armenian, verb paradigm, conjugation forms, future, diachronic change

In this paper, we will consider the basic functions or meanings of the verb forms in Modern Armenian which refer to events that will take place in the future. The present paper is the first step in my research aiming to re-arrange the verb paradigms of Modern Eastern and Western Armenian, which will be equipped with the names reflecting the basic grammatical functions of the forms.

The following are the conjugation forms to be focussed on:

- (1) a. V-*elu/-alu* + (auxiliary) copula ex. *grelu em; grelu ēi*
 b. *piti* + simple verb form [=subjunctive] ex. *piti grem; piti grei*(East.)/*piti grēi*(West.)
 c. *k-/kə* + simple verb form [=subjunctive] ex. *kgrem*(E)/*kə grem*(W); *kgrei*(E)/*kə grēi*(W)

Mainly referring to the descriptions found in textbooks for learners of the Armenian language written in English or French, we will identify the basic semantic functions of the forms at issue. We also insist that the futurity and the non-occurrence of the expected situation that some of the forms convey are semantic or contextual by-products derived from their basic functions, which suggests that we need not append the property of futurity or modality to the names of these forms.

The forms in (1) are homonymous between Eastern and Western Armenian, namely, they have different basic functions despite their similar morphological formations. This is due to the differences in the historical development of the two varieties of the Armenian language. The particle *piti* originated from the old Armenian word *pitoy* 'necessary'. While the verb forms with *piti* still retain the implication of obligation in Eastern Armenian, they changed further to acquire the meaning of simple future in Western Armenian. This kind of change is cross-linguistically common, as Bybee et al. (1994) and other scholars illustrate. The ancestor of the *k-/kə* forms denoted a progressive activity, and Western Armenian now uses its descendants as the simple present (and the imperfect). On the other hand, since Eastern Armenian invented another new verbal formation for the present (and the imperfect), the *k-* forms have been driven away from this semantic area. According to Haspelmath (1998), in such a situation, old present forms can trace two developmental paths; one is a path to futures and the other to subjunctives. Modern Eastern Armenian has both the future indicative indicated by the forms in (1)a. and the subjunctive which itself developed from the old present. We can, therefore, suppose that the *k-* forms are on the way from the present to a subjunctive mood as well as to a future tense, as is suggested by their basic functions we identify in this paper and various uses they manifest.